

二 秦氏の豊前国進出と開発

秦氏の豊前
国への進出

秦氏が、豊前地方へその勢力を伸ばし、秦氏—某勝—秦部の組織を作り上げていたことが戸籍の残簡からもうかがい知ることができる。その秦氏がこの地方で勢力を拡大し始めたのはいつのころからであろうか。秦氏については秦の始皇帝（しこうてい）の後裔（こうがい）でその祖弓月君（ゆづきのきみ）が「己が国の人夫甘県」を率いて渡来したという伝承を持った豪族であるが、実際の渡来は五世紀末ごろではないかとされており、渡来の背景には当時の朝鮮半島での政治情勢とのかかわりがあった。秦氏の故地とされる新羅（しんら）は五世紀後半には北方の高句麗（こうくり）の集中した攻撃を受けており、このような戦火を避けて倭国へ渡来したのではなかろうかと考えられている。渡来後の定住地は山城国（やましろのくに）の京都盆地の葛野付近とされており、優れた土木工事の技術によって京都盆地の開発を行うとともに朝廷の大蔵・内蔵など財務に関与して物資の集積や交易も行って勢力を蓄えていった。更に大和政権が五世紀末から六世紀にかけて関西以西を支配圏に入れると、西日本各地に居住していた新羅・伽耶系（かや）の渡来人を部民化していったと考えられている。特に磐井（いひ）の乱後の六世紀前半に屯倉が設置される際にはその掌管者（しやうかんしや）として北九州へも勢力を伸ばし、豊前国戸籍にもみられるように山国川西岸から以北の豊前地域へも進出したものと考えられる。豊前地方では七世紀後半から八世紀初頭にかけて仏教寺院の建立が始まり、特に前出の地域からはそれらの寺院の屋根に葺かれた優れた新羅系瓦の出土もみられるが、このことは秦氏が新羅からの渡来系氏族であり、その部民化にあたって新羅・伽耶系の渡来人を

組織したと考えられていることともよく
符合している(第31図参照)。

秦氏とその技術
秦氏はその本拠を置
いた葛野に「葛野大

堰」を造るなどして先進の土木技術で京
都盆地の開発に力を注いだが、『日本書
紀』雄略紀十五年条で「秦造酒が養
蚕をし、絹を織り篋に盛って宮廷に貢納
し、それが山のごとく朝廷に積まれた」と

という記述や同十六年条には「諸国に桑
を植えて秦の民に養蚕・機織による調・
庸に携わらせた」という記述などから秦
氏Ⅱ養蚕・機織の技術を保持していた氏
族としてとらえられている。しかし上田

正昭氏は調・庸などの用字には後の潤色もあり「養蚕・機織」とは必ずしも秦氏は密接なつながりはないの
であって、新羅に由来するハタに機織のハタをあてはめたとこのような話ができたこととみられ
ないこともない」(『帰化人』古代国家の成立をめぐる、上田正昭著 中公新書)と述べ、また関見氏も「ウズマサ



第31図 畿内の周辺に分布する主な渡来氏族
(歴史読本入門シリーズ「渡来人は何をもたらしたか」人物往来社 1994より)

の話を除くと機織の民という根拠は完全になくなる。秦氏を機織技術の氏と決めてかかるわけにはいかない」（『帰化人』関晃著 日本歴史新書）としていて、慎重な取り扱いを提起している。

次にそのほかの秦氏の技術として平野邦雄氏は、鑄造・木工をあげ「鑄造も秦氏と新羅人によつて技術が伝習されたといわれる。…木工も秦氏には新羅系帰化人といわれる猪名部が属し、自らも多数の木工を輩出した」（『帰化人と古代国家』平野邦雄著 吉川弘文館）と述べている。また同氏は、大宝令施行以後の金属工人の研究から、雑工人Ⅱ鑄工・銅工Ⅱ秦氏系Ⅱ新羅系技術とする考えを述べている。このことに関連して豊前国をみれば、古代における香春岳からの採銅があげられる。奈良時代に東大寺大仏の造営の際には豊前国の産出と考えられる「西海之銅」が使われており、また『延喜式』（主税、上、卷二十六）には鑄銭の年料として「豊前国の銅二千五百六斤二分四令珠、鉛千四百斤…」とみえ、これは香春岳などからの産出と考えられていて、奈良・平安時代には盛んに銅・鉛が産出されていたことが分かる。『豊前国風土記』逸文には

田河の郡、鹿春の郷、郡の東北の。かたにあり。此の郷の中に河あり。年魚あり。其の源は郡の東北の杉坂山より出でて、すぐにま西を指して流れ下りて、真漏川に湊い会えり。此の河の瀬清淨し、因りて清河原の村と号けき。今、鹿春の郷と謂うは訛れるなり。とよま昔、新羅の国の神、自ら度り到来りて、此の河原に住みき、すなわち名づけて鹿春の神と曰う。又、郷の北に峰あり。頂に沼あり、開き三十歩許あり。黄楊の樹生いたり。また兼、竜の骨あり。第二の峰には銅と竜の骨とあり。第三の峰には竜の骨あり。

とあり、田河郡鹿春の郷（現香春町）に新羅神の到来したことや香春岳に銅の存在することが記述されて

いる。新羅神は産銅神と考えられており、この神を奉斎する新羅人がこの地に渡来してきて、古代においては香春岳からの採銅にかかわっていたものと考えられ、また秦氏の部民としても組織されていたものである。

また新羅神に関して、香春岳山麓の香春神社には、息長大姫大目命、忍骨命、豊比咩命の三神が祭られているが、『延喜式』卷十「神名帳」には田川郡辛国息長大姫大目命神社とあり、『日本三代実録』には豊比咩命を辛国息長比咩神としていて「辛国」は「韓国」と同じ意味であり、これらの神々こそ『豊前風土記』逸文にいう渡来した「鹿春の神」を指すものであろう。

次に鑄造関係についてみると、太宰府観世音寺の鐘楼にはその下縁底部に「上三毛・麻呂」の陰刻銘のある梵鐘がある。この鐘は形状・法量をはじめ撞座まで極めてよく似た京都府妙心寺の梵鐘銘から七世紀末の年代推定がなされているが、その刻銘が鑄工の出身地と名前を刻したものであれば、既出の大宝二年（七〇二）豊前国戸籍の上三毛郡の塔里・加目久也里の秦氏の部民を思い起こさせる。

このように秦氏系の技術として灌漑土木に関するもの、養蚕・機織に関するもの、採銅・鑄造に関するものなどがみられる。古代の初期において大和政権の勢力拡大とともに豊前地方へも進出してきた秦氏は、渡来系の人々をまとめながら秦部の組織を形づくり、この地方の農業・養蚕・鋳業などに関して多方面にわたっての開発に携わったことが考えられる。